

この世の渚に琵琶デュオ参上つかまつる。

うつしよ
～ミナマタと説経節と現世と～



薩摩琵琶正派 後藤幸浩／鶴田流五弦琵琶 水島結子

「みなまた 海のこえ」(石牟礼道子 作) 上演！

今の世の説経節として、しゅうりりえんえん、魂込めて、

二面の琵琶をかき鳴らし、歌い、語ります。

美しく、哀しく、愛おしい、あの世界へ、

幻のあの<渚>に、ひたひたと包まれる、一夜をともに……。

●日時：2013年 5月15日(水) 19時開演(2時間弱を予定)

●会場：西南学院大学 西南コミュニティーセンター・ホール [\(地図\)](#)

●入場料：一般1000円、学生無料 ※事前申し込み不要(当日券のみ)

●問い合わせ：田村元彦 mtamura@seinan-gu.ac.jp 姜信子 wildfrances@gmail.com

<演目>

1. 信徳丸 「呪いの六寸釘打ちの場」 「開眼」
2. 対話：琵琶デュオ&姜信子 「説経節からミナマタ、そして…」
3. 石牟礼道子原作「みなまた 海のこえ」

— 現代版説経節「みなまた 海のこえ」について —

本作品は、そもそもは、2013年5月11、12日に熊本で開催される、ハンセン病市民学会の特別企画「ミナマタからハンセンへ」のために創りあげられました。

「ハンセン病」という「この世の果て」の闇に、「水俣病の渚」を招きよせよう。そのために、石牟礼道子さんが詩的なことばで歌うように書いた美しい一篇の物語、『みなまた、海の声』を、それに語るに最もふさわしい形で、つまり説経節で、歌い語ってみるといえるのはどうだろうか？
特別企画のコーディネータであり作家の姜信子がそう思い立ち、琵琶奏者後藤幸浩に相談したのがことのはじまりでした。

説経節には「小栗判官」「信徳丸」といったハンセン病に深く結びついた演目があります。かつて、『一遍上人図絵』の中でも、説経節を語る琵琶法師とハンセン病者は並んで描かれていました。その説経節をもって、『みなまた、海の声』を歌い語る。人間の魂にとりついた病としての水俣病とハンセン病の問題が根ざすところ、私たちが向かうべき世界を、琵琶の響き、歌の力、語りの力で、ありありと描きだす。そのような試みとして、現代版説経節「みなまた 海のこえ」は誕生したのです。

<出演者プロフィール>

水島結子（琵琶デュオ） <http://www.biwa-mizushimayuiko.com/>

東京都出身。早稲田大学教育学部社会科卒業。鶴田流琵琶を鶴田流第一人者である田中之雄に師事。06年 大韓民国ソウル大学国楽科に、学部生では初の日本人交換留学生として留学。チャンゴ、プク等の打楽器を専攻。帰国後もパンソリ、韓国南道民謡、伽耶琴等を学び、改めて言語のリズムと語り芸のリズムに開眼し、再び琵琶語りの言葉のリズムを意識して演奏するようになる。特に韓国の伝統音楽を通じた交流、演奏、などに力を入れている。最近は薩摩琵琶正派の後藤幸浩氏と四弦琵琶×五弦琵琶の新たな境地を切り開くべくライブ、コンサート、学校公演、メディアなど様々なシーンで活躍。

後藤幸浩（琵琶デュオ） <http://www.tanibito.com/goto.htm>

60年熊本生まれ。大学入学後、世界の民俗音楽を聞くうち、日本の楽器にも興味を持ち、とくに琵琶にひかれる。正伝薩摩琵琶（戦国～江戸時代からの伝統を引き継いでいる、オリジナルの薩摩琵琶）最後の名人と言われた故・普門義則の演奏に、それまで聞いて来たさまざまなポピュラー音楽と同じパワーや味わいを感じ即、入門。古典を修行しつつ、琵琶、アルト・サクソ、ドラムズによるグループ“ARAFU”を結成。渋谷ジャンジャン、NHK・TV「プライム10・われら新音楽人」、東京ニュージャズ・フェスティバルなどに出演。雑誌『別冊太陽・日本の音』（平凡社）にも紹介される。ARAFU解散後は琵琶本来の魅力である語り・歌を追求。琵琶の歴史、琵琶伝来の土地である九州を意識した音作り、古典、オリジナル曲、カバー曲など幅広いレパートリーで、琵琶演奏家の中でも独自の地位を築いている。日本琵琶楽協会会員、熊本県邦楽連盟理事、学習院大学・和光大学非常勤講師

姜信子（作家）

61年横浜生まれ。86年に「ごく普通の在日韓国人」で、ノンフィクション朝日ジャーナル賞を受ける。以降、民族や国家といったものを越えてゆく言葉を探して、やがて旅を生きる人々の歌に呼ばれて、韓国、中国、台湾、沖縄、サハリン、ハワイ、中央アジア、ロシア……と旅しては、書いて読んでときどき歌ってまた旅に出る日々。

著書に『ごく普通の在日韓国人』『うたのおくりもの』（いずれも朝日新聞社）、『棄郷ノート』（作品社）、『日韓音楽ノート』『ノレ・ノスタルジーヤ』『ナミイ！ 八重山のおばあのお話物語』、『イリオモテ』（いずれも岩波書店）、『今日、私は出発する』（解放出版社）、『は生まれ 犀の角問わず語り』（サウダージブックス+港の人）、『旅する対話』（春風社）など。